

ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究 (VII)

—— 歌唱教材「ふるさと」からの考察 ——

Piano Accompaniment: Techniques and Instruction (VII)

— Teaching Materials for Singing Practice as Exemplified by “Furusato” —

寺 蘭 玲 子

Reiko TERAZONO

1. はじめに

音楽教育の現場において、特に歌唱指導の場合、ピアノ伴奏が重要な役割を担っていることは、これまでピアノ伴奏の手法とその指導法の研究 (I)(II)(III)(IV)(V)(VI) でも述べてきた。

本短大の場合もこれまで述べてきたように、わずか2年間で修得した技術をもって現場に臨んでいく学生たちが不安をもっていることを杞憂し、如何に力をつけさせ自信をもたせていくかということ常を常に考慮に入れながら指導の任にあたりたいと考えつづけている。

現在、本短大での著者の担当科目の中に器楽 I・II, 表現 III が含まれているが、ピアノ伴奏の指導と実際をも取り入れながらの講義・演習になっている。前回のピアノ伴奏の手法とその指導法の研究 (VI) でも述べているが、この10数年来実施している入学時のピアノアンケート調査では、毎年30~35%の学生が初心者である。小学校・幼稚園・保育園などに就職していく児童教育学科の殆どの学生たちにとっては、何と云っても採用試験から現場での音楽の指導の実際にいたるまで、ピアノの技術の修得は欠くべからざるものになっているわけである。保育内容の「表現」音楽に関しても、先ず“うた”が基本であるとは言えるものの、子どもたちの関心を引き出し、雰囲気づくりをしていくのにはピアノ伴奏が大きな役割を担っていることは、現場で保育の指導実際を見ると明らかである。

平成17年度後期、表現 III の開講にあたり、児童教育学科幼児教育学専攻2年生220名の学生にピアノ伴奏についてのアンケートを実施した。教育実習等で直面した問題点や、今後修得していきたいことなどを其々が述べてくれたことも考慮に入れながら、今回は小学6年生の音楽の共通歌唱教材“こころのうた”として取り上げられている高野辰之作詞・岡野貞一作曲の「ふるさと」を中心に、現場で歌われる「こどものうた」も取り入れながらピアノ伴奏の手法とその指導法の研究をすすめていくことにする。

2. 子どもと声の力

全日本私立幼稚園連合会九州地区会、第21回教師研修大会鹿児島大会が平成17年(2005年)8月

18日・19日の両日、鹿児島市民文化ホール等で開催された。九州各県や鹿児島県内から、1,714名の先生方の参加を得て、『21世紀、幼児にふさわしい生活を創る～「生きる力」の基礎を培う幼稚園教育の創造～』を大会テーマに全体会・分科会と盛会裏に終了した。講演では、東北大学未来科学技術共同研究センター教授の川島隆太氏が「脳を知り、脳を育む」をテーマに講演、公演「子どもと声の力」では、著者もオペラ歌手で東京二期会副理事長の池田直樹氏のバス・バリトンのピアノ伴奏で協演させていただいた。最後に全員で「ふるさと」を合唱、会場がひとつの雰囲気につつまれた。歌の力・声の力をさらに感じることであった。

「ふるさと」は次世代に是非とも歌い継いでいきたい作品である。歌詞はどこにでもある共通の風景・友人・家族をうたったもの、旋律はシンプルでうたいやすく、しかも美しい。誰もがそれぞれに自身の故郷に又こころの故郷に想いを馳せ、心をひとつにしていける曲であると考えている。ピアノなどの器楽曲であれ声楽曲であれ、音の少ない単純な音楽作品こそ実は演奏は逆に難しいものである。ピアノのソロは卓越した技術をもって演奏する学生たちが、単純なやさしい童謡・唱歌を弾くときの技術には本当にながかりさせられることがしばしばである。自身のピアノに耳を澄まし、また子どもたちや歌手の歌声に耳を澄ましながらか共に歌うということが、簡単なようでいかに難しいかということである。演奏技術に加えて楽曲の解釈や作曲者の意図などを少しでも理解できたならば一層味わいのある演奏になっていくことは明らかである。しかも歌詞が母国語で、ことばの意味や内容を理解できればなおさらである。保育等の現場で、教師が子どもたちに常に元気よく歌わせるばかりの指導でなく、耳を澄まして美しい声で歌っていくという努力をしていかなければならない。先ずは、今回の公演で池田直樹氏と演奏したプログラムの曲目から、伴奏のポイントについて述べていきたいと考えている。

・「誰も知らない」(谷川俊太郎作詞 中田喜直作曲)

NHK みんなのうた独特のアニメーションによって、歌の内容をわかりやすくした一番最初の曲である。

誰も知らない (1)

谷川俊太郎 作詞
中田喜直 作曲

元気よく ♩ = 90 位

1. おほしさまひとつ プッチンともいで
2. とうーちゃんぼうし そーらとぶえんぼん
3. としよりのみみず やーつでのしたで
4. でたらめのことば ひとりごとって

1. おほしさま ひとつ プッチンともいで こんがりやいて いそいでたべて
おなかこわした オコソットノ ホ だれもしらない ここだけのはなし

前奏の2小節が曲をにぎる鍵である。1小節目オクターブで勢いをつけて、4拍目でいきなり *pp* に弾き、息を呑むほどの間を取り、2小節目は左右の反進行をA音に向かってわずかに *accel.*、3小節目の「おほしさま」に入る前を少しゆったり気味にテンポをとって歌につなぐ。3小節以降のうたの伴奏は、割と淡々とリズムを刻んでいくと歌いやすい。谷川俊太郎の詞の魅力を十分に引き出すためには、中田喜直の作曲に忠実に強弱もつけて演奏するということだろう。

・「あめふりくまのこ」(鶴見正夫作詞 湯山昭作曲)

あめふりくまのこ (2)

鶴見正夫 作詞
湯山昭 作曲

やさしくはなしかけるように ♩=108位

1. おやまに あめが ふりました あとから あとから ふってきて
ちよろちよろ おがわが できました

池田直樹氏の話によると、鶴見氏はすてきなおじいさんで、背中を丸めて歩かれる鶴見さんを後ろからみると「あっ、この人があめふりくまのこだ」そういった雰囲気をお持ちの方だったそうである。1926年新潟県村上市生まれ、国立国会図書館勤務時代から雑誌やラジオ番組などで童謡や詩を発表されていたようであるが、1995年9月その生涯をとじておられる。葬儀の時、「あめふりくまのこ」が献唱されたそうである。昭和37年(1962年)5月のこと、NHKテレビの幼児番組「うたのえほん」の6月の歌にメロディーがつけられず窮地に追い込まれていた作曲家・湯山昭氏が、鶴見氏の別の昔の詞を受話器の向こうに聞いてスラスラと曲が浮かび、あっという間にできたそうである。「詞がメロディーを引き寄せ、メロディーはピアノの伴奏を呼び込んだ。」と湯山氏のお話にあるが、物語性と豊かな色彩を持ったあたたかい、しあわせな気持ちになれるすばらしい子どものうたである。

あめふりくまのこ (3)

間奏(3番のあとのみ)

三連符に関しては、水の音の表現が多いことを学生には説明するが、間奏でも「おがわ」

「おみず」と情景を思い浮かべながら丁寧にペダルを使用しながら演奏したいものである。

三連符を指導する際に必ず例に出す曲が、ベートーベンのピアノソナタ「月光」の1楽章の冒頭である。作曲家自身は幻想風ソナタと書いているだけで後に「月光」とタイトルがつけられたものである。三連符の水に映る月が旋律となってあらわれてくる箇所までを演奏して学生たちとともに考えるわけである。またシューベルトのピアノ曲・即興曲作品90の3変ト長調では六連符を演奏して水や風などの表現にふさわしいものであると話している。その際ピアノのペダルに関しては、3本のペダルについての説明と実際を行っている。ピアノペダルに関しては、ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究（I）で説明しているので今回は割愛させていただく。

・「おなかのへるうた」（阪田寛夫作詞 大中恩作曲）

坂田寛夫・大中恩のいとこ同士の作品である。平成17年度鹿児島県私立幼稚園登録試験の課題曲でもあった。

おなかのへるうた (4)

ユーモラスに ♩ = 112

阪田寛夫 作詞
大中恩 作曲

1. どうして おなか が へるのかな けんかをする と へるのかな
なかよししてても へるもんな かあちゃん かあちゃん
おなかと せなか が くつつくぞ

童謡「サっちゃん」の作詞者で、日本芸術院会員の阪田寛夫氏は、今年平成17年（2005年）3月22日肺炎のために亡くなられた。1985年、伝記小説「まどさん」を發表されたが、その「まどさん」こと、まどみちおの作品が次の「やぎさんゆうびん」である。

・「やぎさんゆうびん」（まどみちお作詞 團伊玖磨作曲）

1952年、NHK ラジオ「幼時の時間」の「うたのおばさん」コーナーで放送され絶賛を浴びた作品。作曲は團伊玖磨氏。交響曲やオペラ「夕鶴」などの名曲を数多く残しておられる。團の童謡づくりは1948年放送局の専属作曲家になった時から始まっている。戦前の童謡から新しい童謡をつくるべきだと主張していた團にとって絶好の舞台になり、最も気に入った詩が「ぞうさん」「やぎさんゆうびん」だったそうである。その詩人がまどみちおである。

やぎさんゆうびん (5)

可愛らしく ♩=120

まどみちお 作詞
團 伊 玖 磨 作曲

1. しろやぎさんから おてがみついた くろやぎさんたら よまずにたべた
しかたがないので おてがみかいた さっきのがみの ごようじなあに

今回の池田氏の演奏でも1・2番繰り返し1番そして2番の「よまずにたべた」で「オシマイ」と終了したのだが、童謡唱歌ものがたり（読売新聞文化部・岩波書店）に團の談話がある。「1番と2番はヤギが入れかわるだけで内容は同じ。この面白さを伝えるには、2番で完結せず、エンドレスな感じの曲がいい。旋律はすぐ浮かんできた」と語っておられる。池田氏が実際東京での演奏会で先のように演奏したところ、演奏会にみえておられたまどみちお氏は大変喜ばれたそうである。

学生と歌うたびごとに特に留意する箇所は、「しかたがないので おてがみかいた (v) さっきのがみの ごようじなあに」の (v) のブレスの部分である。大抵の場合「さっきの」が「おてがみかいたさっ」「きのごようじ」となりがちなのである。前奏部分は可愛らしいやさしい音で弾くことが望ましい。

・「そぼろ」(遊びうた・亀山法男作曲)

これっくらいのお弁当ばこに おにぎりおにぎり ちよいつめて
きざみしょうがにごましかけて にんじんさん ごぼうさん すじのとおったふき

池田氏のオリジナルの曲である。友人の作曲家・亀山法男氏がフランスの作曲家ラベルの「ボレロ」に対抗して1985年4月に作曲している。「これっくらいのお弁当箱に」を延々と繰り返すのであるが、いろんなサイズのお弁当箱が登場する。歌詞は同じであるが、うれしそうな人、どういうわけだかお弁当を作りながら泣いている人など色々な人も登場する。伴奏はLentoのゆっくりのテンポからとてもかわいく始まり、1番はスタッカートでかわいらしく、2番は明るく少し動きを持って、三連符のピアノにスキップのうたが楽しい。3番はやや深刻にベートーベンのピアノソナタ「月光」の1楽章のピアノにのせてフォルテで堂々と歌う。聴衆の反応があり、演奏していても楽しい。4番はAllegroでコミカルに歌い、ピアノは高音部でトリルが入り華やかである。5番は中に歌い手のダンスやお弁当箱を見る仕草なども入り楽しく展開していく。次第にテンポを落とし6番のAdagio grandiosoに入る。ffでピアノもオクターブで堂々と歌いきり、後奏はダイナミックに速く6小節の間でrit.dimでアルペジオで

曲を閉じる。亀山氏が、多分に演技してうたうことと記してある。とにもかくにも実に愉快的な曲である。

・「森のくまさん」(馬場祥弘 作詞・作曲)

森のくまさん (6)



オクターブの前奏が難しい学生には単音で弾くことをすすめている。オクターブも高音部を強めに弾くと明るい感じ、低音部を強めに弾くと落ちついた深い感じと説明をしている。

ハ長調の簡易伴奏の例にもよく用いる曲である。今回は池田氏がひとりでクマと女の子の二役を動きをつけながら歌ったのだが、保育や教育の現場でも教師は役者でなければならないとつくづく思うことである。

このほか、ミュージカル「メリーポピンズ」より「私は煙突掃除屋さん」や、オペラ「フィガロの結婚」より「もう飛ぶまいぞこの蝶々」(モーツァルト作曲)などを演奏したが、いずれもオーケストラの伴奏であるので、総譜を見ながらどこの箇所がどの楽器で演奏されるのかをチェックして、楽器の特色を考え、音色が豊かになるように工夫するのである。

最後に、池田氏が「こどもたちに、私たちが責任を果たさなければならないのは、素敵な故郷を残すこと」と全員で心をこめてうたったのが「ふるさと」であった

以上今回の演奏曲目についての筆者の演奏のポイントを述べてみた。歌手との協演に際して、著者が常に心がけていることは、共演者が気持ちよく歌えるような雰囲気作りである。その為には自身が先ず健康であること。共演者に不安な気持ちを抱かせないように配慮することが伴奏者のつとめであると考えている。このことは、現場での幼児・児童の音楽指導にも共通することであろう。その為には、楽曲の理解に加えて演奏の技術も伴っていかなければならない。気持ちをこめて演奏するテクニック以前のメカニクスの技術の壁にぶつかっている学生たちの悩みが以下のアンケートに表れているといえよう。学生のアンケートを次にあげてみることにする。

3. ピアノ伴奏についての学生アンケートより

(平成17年10月17日, 18日, 20日実施)

① ピアノ伴奏で難しいと感じることについては次のような答えが返ってきている。

- ・ 初見で弾くこと, 初見でうたうこと

13名

- ・ 楽曲の最もふさわしい速度での演奏ができない。 16名
 - ・ 子どもの声を聴きながら自身も歌いピアノを弾くこと。 26名
 - ・ 子どもを見ながら、手もとを見ないでの弾き歌いは大変である。 6名
 - ・ 子どもの声とピアノとの音のバランスがとりにくい。 3名
 - ・ コードネームでの伴奏が難しい。 4名
 - ・ 曲の途中でピアノ伴奏が止まってしまう、すぐに伴奏にもどれない。 9名
 - ・ リズムの取り方に苦勞する。(シンコペーションなども含む) 9名
 - ・ ピアノを始めてから2年目(初心者)で楽譜の読み方に一苦勞。 13名
 - ・ 強弱のつけ方が難しい。 4名
 - ・ 左右のバランス(音量)(リズム)が取れない。 8名
 - ・ 主旋律を弾かない和音のみの伴奏が難しい。 3名
 - ・ 指使い(運指法)が難しい。 12名
 - ・ 手が小さいのでオクターブの伴奏が難しい。 6名
 - ・ トリルができない。 1名
 - ・ ペダルを踏むタイミングが分からない。 4名
 - ・ 暗譜が大変である。 5名
 - ・ ハ長調以外の調や臨時記号の曲が難しい。 15名
 - ・ 前奏から歌にはいる導入・タイミングが難しい。 4名
 - ・ オルガンでの伴奏が難しい。(足踏みオルガン) 1名
 - ・ 楽曲を表情豊かに弾けない。 2名
 - ・ 各園で使用する宗教曲などが難しい。 1名
- ② ピアノ伴奏でこれから修得したいことについては以下のことが述べられた。
- ・ ペダルの使い方。 55名
 - ・ 正しい運指法。 1名
 - ・ 強弱のつけかた。 3名
 - ・ 子どもを見ながらの弾き歌いができるようになりたい。 4名
 - ・ 簡易伴奏のつくり方・弾き方。 80名
 - ・ コードネームの読み方・弾き方。 25名
 - ・ 初見で弾けるようになりたい。(楽譜の読み方) 20名
 - ・ 子ども前でリラックスして弾きたい。 1名
 - ・ 楽曲にふさわしい速度の取り方。 1名
 - ・ 両手のバランスを取れるようになりたい。 2名
 - ・ 曲の途中で止まらずに弾けるようになりたい。 1名
 - ・ 楽曲の記号など(速度・曲想)をもっと知りたい。 3名
 - ・ リズムの取り方。 1名

- ・ 子どもたちが楽しくうたえるような弾き方・歌い方. 3名
- ・ 歌をもっとたくさん習いたい. (あたらしいうたも) 11名
- ・ 他の楽器での伴奏もできるようになりたい. 1名
- ・ 抑揚のある表情豊かな伴奏ができるようになりたい. 4名
- ・ 移調して弾けるようになりたい. (子どもの声の高さ) 2名
- ・ 正しい楽譜の読み方. 2名
- ・ きれいな音で弾けるコツ. 2名
- ・ ピアノの技術を磨くには. 2名
- ・ 指がとどかないときは (オクターブ) 1名
- ・ スラーとスラーの間のつなぎかた. 2名
- ・ 速い曲でのスタッカートでの弾き方. 1名
- ・ 総譜の読み方. 1名
- ・ いろいろな伴奏のパターンを知りたい. 1名

①からは、子どもの心をひきだしながら、子どもの声に耳を傾け、曲想を生かしてしかも自身も楽しく弾き歌いすることが如何に困難であるかということが容易に伺い知れるわけである。したがって、先に述べたように、約3割強の初心者の学生たちが簡易伴奏を修得したいという回答が②に出てきて当然であると考え。また豊かな音色に不可欠なペダルの使い方を修得したいと考える学生が多かったことも頷けるところである。それぞれの学生が現時点でのそれぞれの力にあった伴奏の中で、こどもたちが気持ちよく歌えるような音楽づくりができるような指導法をと常に考える。

先に述べたように、今回は「ふるさと」を歌唱教材に以下指導法の研究をすすめていく。

4. 楽曲「ふるさと」について

平成17年7月27日の日本海新聞のローカルニュースの紙面に『岡野貞一の伝記 鳥取の鈴木さんが自費出版』の記事が掲載された。鳥取市在住の作曲家、鈴木恵一氏が30年以上にわたって調査研究された、岡野貞一の生い立ちや音楽家としての数々の業績などをまとめられた岡野の初めての単独の伝記本である。著者にとっても待ち焦がれていた研究書であった。かつて合議制で作られていた文部省唱歌の作詞者・作曲者が教科書に記載されるようになったのは最近になってからのことである。高野辰之・岡野貞一コンビの唱歌は「おぼろ月夜」「もみじ」「ふるさと」「春の小川」「春が来た」「ひのまる」とこれまでも小学校の文部省唱歌として愛唱されてきた。

なかでも「ふるさと」は、小学6年生の教材となって92年、今は唱歌の域を超えて日本人に最も愛唱されている曲である。大きな行事や集い、先に述べたようにコンサートなどでも時や場所をこえ皆に歌われ続けている曲である。鈴木氏は著書の中で、大勢で歌われている場面を100例をあげておられるが、それほど国民的歌曲となっているということであろう。昭和48年10月に岡野貞一顕彰「ふるさと音楽碑」が鳥取市久松公園入口に建立された。筆者も彼の地に立ち、しばし「ふるさ

と」のメロディーに耳を傾けたものである..

「ふるさと」は岡野貞一36歳，大正3年（1914年），尋常小学唱歌（六）として「おぼろ月夜」とともに掲載されて以来長く歌い続けられ，昭和33年より歌唱共通教材に定められてきた。

今回は小学生の音楽6（教育芸術社）に掲載されている楽譜を使用させていただき以下考察していくことにする。

ふるさと (7)

♩=76~84

mf

1 う さ ぎ お い し か の や ま
2 い か に い ま す ち ち は は

こ ぶ な つ り し か の か わ き
つ つ が な し や と も が き

p

ゆ め は い ま も め ぐ り て
あ め に か ぜ に つ け て も

ゆ め は い ま も め ぐ り て
あ め に か ぜ に つ け て も

mf

わ す れ が た き ふ る さ と
お も い い ず る ふ る さ と

mf

曲はへ長調，四分の三拍子，16小節からなる二部形式である。速度は♩=76~84と全体に滑らかにたつぷりと歌うようにと指示されており，前半は二部に後半は三部合唱に編曲されているものである。故郷の美しい自然や，父母，友人たちを想って書かれた歌詞が文語体ではあるが，数少ない言葉で格調高いものであるので，「如何に在す」「恙なし」「友がき」などの語句の説明さえ子どもたちにできればよく理解し歌っていけると思う。先ずは主旋律（高音部）を気持ちをこめて歌えるようにしていきたい。その為にピアノ伴奏の留意すべき点については後で述べることにする。

次が高野辰之の歌詞である。

故郷

1. 兎追ひしかの山、小鮎釣りしかの川、夢は今もめぐりて、忘れがたき故郷。
2. 如何にいます、父母、恙なしや、友がき、雨に風につけても、思ひいずる故郷。
3. こころざしをはたして、いつの日にか帰らん、山はあおき故郷、水は清き故郷。

1998年発行の長峰佐和女史の著書「日本歌曲の詩想」の中に紹介されているが、昭和20年代末、高野辰之作詞の「ふるさと」にも新しい歌詞をつける試みがあり、つぎのような歌詞が紹介されたとある。大人には美しくとも子どもの共感を呼ばない文部省唱歌に対する批判があったからということである。一節のみであるが、やはり本来の歌詞に代えられるものではなかったろう。

風にゆれる麦の穂 花にあそぶ蜜蜂 いつもたのしく思い出すのは ぐみのみのるあの丘

5. 作詞者・高野辰之、作曲者・岡野貞一について

高野辰之といえはすぐに島崎藤村の小説「破戒」が思い浮かぶ。ある寺の描写から始まるその寺のモデルとなった蓮華寺の住職が、高野の岳父になるという。作家の猪瀬直樹氏が「唱歌誕生－ふるさと創った男」(文春文庫)の中でエピソードを紹介している。当時22歳の高野が寺の娘と結婚する際の母親の条件が「将来、人力車にのって山門から入ってくる男になるなら」だったそうである。3番の歌詞にある〈こころざしをはたして いつの日にか帰らん〉を思わずにはいられない。

高野辰之は明治9年(1876年)長野県下水内郡豊田村生まれの国文学者である。長野師範学校を卒業後、長野県内で教師をしていたが、東京大学の上田万年博士の徒弟として文学の道に精進、大正14年東京帝大より論文「日本歌謡史」で文学博士号を授けられ、翌年大正15年に同大の講師になっている。49歳のことである。また東京音楽学校に勤務したのは32歳のとき、当初は邦楽調査係りとして琴・三味線・尺八などの邦楽を学ぶ邦楽科の設置に尽力、また文部省唱歌の編纂の作詞委員にもなっているが、唱歌作詞以外には浄瑠璃史出版など活動の範囲も広い。「元禄歌舞伎」「日本歌謡史」「日本演劇研究」などの出版、江戸文学、演劇歌謡史の大家としても活躍している。昭和23年(1948年)その生涯を閉じている。

岡野貞一は明治11年(1878年)2月16日、鳥取県邑美郡古市村に生まれる。吉方小学校を経て、明治24年因幡高等小学校を卒業する。翌年9月にはセベランス牧師より洗礼を受け、鳥取教会ではクリスチャンとして讃美歌を歌いオルガンを弾くなど音楽の基礎を学んでいる。明治26(1893年)年3月、15歳になった貞一は故郷を離れ、岡山市のキリスト教系の薇陽学院に入学。明治24年に来岡し花畑のスラム地区に最初のセツルメントを起こし、貧窮児の救済に生涯をささげた米人宣教師P・A アダムス女史に楽才を認められ、音楽への道を志すことになる。明治28年6月に中退、明治29年東京高等師範学校附属音楽学校予科に入学。東京音楽学校時代在学中(明治29年～33年)の、東京音楽学校演奏会史のプログラムを見ると、瀧廉太郎や小山作之助、幸田延などの名前が並んでいる。明治33年7月7日の卒業式音楽会に出演、卒業し同校の研究生となり授業補助の若き教師

として活躍をはじめている。明治39年に助教授に、明治40年には尋常小学校読本唱歌編纂員に任命され、大正7年には小学校唱歌作曲委員を委託されている。その後も数々の委員を命ぜられて、大正12年に教授に昇任、昭和7年(1932年)に退官している。昭和7年より16年までの10年間に全国の学校校歌を60曲、生涯に94曲を作曲している。大部分は東京音楽学校を通じて作曲依頼されたもので、北海道から熊本、満州にいたるまでで、作詞は土井晩翠・高野辰之・吉丸一昌・相馬御風・犬童球溪・野口雨情などとすばらしい名前が連なっている。作曲者は岡野の他、信時潔が59曲、下総覚三が52曲、橋本国彦が41曲と並んでいる。参考までに高野辰之は校歌作詞が70校もある。退官後もなお、本郷中央教会の礼拝音楽のオルガン演奏、聖歌隊指導・指揮、教会の宗教行事に加え、東京音楽学校同声会の理事や理事長職なども加わり多忙な日々を送っている。昭和16年12月29日、64歳の生涯を閉じ、31日に本郷中央教会で葬儀が行われ、岡野が愛唱・愛奏していた聖歌161番(きよきみたまよ)が流れた。「ふるさと」や「おぼろ月夜」と同様、3拍子の曲である。次が聖歌161番「きよきみたまよ」である。

岡野貞一の音楽の基礎が讃美歌によって培われたものであることも理解できる。

きよきみたまよ (8)

161 きよきみたまよ

Holy Ghost, with light divine
Andrew Reed, 1817

HORTON
Xaver Schnyder von Wartensee, 1824

きよきみたまよ おぐらきこころ てらしたまえや みひかりをもて
らきこころ てらしたまえや みひかりをもて

1 きよきみたまよ、 おぐらきこころ てらしたまえや、 みひかりをもて。
2 きよきみたまよ、 うちなるつみを きよめたまえや、 みちからをもて。

1. きよきみたまよ おぐらきこころ てらしたまえや みひかりをもて
2. きよきみたまよ うちなるつみを きよめたまえや みちからをもて

6. 「ふるさと」の伴奏について

ここでは、小学生の音楽6(教育芸術社)のピアノ伴奏譜を用いて、奏法について以下考察していくことにする。音域を考慮して上記の楽譜同様へ長調の「ふるさと」にする。ペダルは筆者の演奏するように記入した。

ふるさと (9)

教科書●P.30
ふるさと 作詞 文部省唱歌 作曲 高野辰之 編曲 岡野貞一 浦田健次郎

♩ = 76~84

1 う さ き お い い か の や ま
 2 い さ に ろ い ま す ち は し は て
 3 こ こ ろ ぎ お い ま す ち は し は て

こ ぶ な つ り し か の か も が わ
 つ っ が の の し や と の も が わ
 い つ つ の の ひ に か か え が ら きん

ゆ め は い ま も め ぐ り て
 あ め に か ぜ に つ け る て も
 や ま は あ お き ふ る さ と

わ す れ が た き ふ る さ と
 お も い は い き ざ る ふ る さ と
 み ず は き よ き ふ る さ と

前奏

⑬—⑯小節 (前奏)

前奏は、楽譜どおり最後の4小節を奏する。ペダルは表記のとおりである。ペダルに関しては先にも述べたように、ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究 (I) を参照されたい。主旋律を最も明瞭に、左手低音部との音量の調整をしながら演奏したい。スタッカートが⑬小節についているが、あまり鋭くなく、同音であるので念を入れて丁寧にと考えるほうが望ましい。⑮小節は内声の8分音符の後拍がぞんざいにならぬよう十分音を響かせてから次に進んでも決して遅れることはない。「うさぎおいし」に導入するのでテンポはあまり崩さないほうがよい。楽譜では4小節の dim. が記入されているが、筆者は⑮小節でわずかにふくらませ「ふるさと」を強調している。

①—④小節

右手伴奏 AF 音の F を意識して、歌を聴きながら丁寧に弾く。オクターブで動く左手が荒くならないように注意しながら「かのやま」に向かってわずかずつクレッシェンドしていく。8分音符の裏拍が短くならないように、③小節の右手は高音部を浮かび上がらせるように弾く。④小節の3拍目は次の「こぶな」につなぐので少し強めに弾いて歌を引き出すようにする。

⑤—⑧小節

この4小節は逆にデクレッシェンドしていくが、左手の動きに留意しながら右手の内声を丁寧に、高音部の旋律をレガートで奏する。

⑨—⑫小節

⑨⑩小節ともに右手和音の高音部に重心をおきながらレガートに弾くのはなかなか難しいが、左右ともに指使いを工夫して部分練習をすると良い。「めぐりて」の D 音に向かってクレッシェンドして歌を助けるとよい。歌い手がより歌いやすく又自信を持って歌えるような雰囲気にする為に、筆者は最高音の少し手前でクレッシェンドをかけているが、効果的である。

⑬—⑯小節

曲の山になる4小節である。前奏でも述べたように丁寧に「わすれ」をすこし強調して「がたき」で丁寧に、「ふるさと」につないでいく。

この伴奏形は非常にシンプルであるので、かえって難しい。奏者の力量がはっきりとでてしまう伴奏になる。先にも述べたが、単純な音楽・構成こそが最も難しいということである。

簡易伴奏としては、主に主要三和音を基本に、ここでは FC_7B^b の三つのコードを用いて和音で伴奏、または根音になる FCB^b の三音だけで伴奏ができることを説明、演習をしている。この際、旋律を右手で弾き、左手で和音ないしは単音で伴奏をつけるのであるが、両手で和音伴奏にする場合は、分散和音も含めてリズムや音形を工夫して各自それぞれの力にあわせて弾くように指導している。

ところで、「ふるさと」に匹敵するような楽曲は、それぞれの国にあるだろう。今回は「ふるさと」とともに、東アジアの唱歌～旧満州・韓国・台湾・中国の唱歌にも関心を持ち、機会を見つけては唱歌を聴いたり資料や楽譜を読むことを心掛けてきた。筆者の愛唱歌・韓国の「故郷の春」の資料収集のために、2005年9月韓国ソウル市を訪ねた。韓国烏頭山 (オードゥサン) 統一展望台は

1992年9月8日にオープン、歴史的軍事要衝地・西部前線の最北端、北朝鮮地域を直に観察できる統一教育体験の場であるが、先ず中に入るとすぐに耳にしたのが「故郷の春」その曲であった。現在の北朝鮮の小学校の教室を再現した部屋では、教育制度についての資料や教科書・1999年7月15日付けの教科書には「ウマ」などの唱歌も見ることができた。展示してある教科書・ノート・筆記用具等やわずかに見る内容や紙の質などで北朝鮮の音楽教育事情をはかるのは誠に軽率ではあるが、経済的にも豊かな韓国と北朝鮮との現状のほんの一部を垣間見た気がする。統一展望台からはイムジン川とハン川の対岸に北朝鮮の自然とわずかに農家らしき建物を数軒見ることができた。対岸までわずか460メートルの箇所もあれば、最も川幅の広いところが3.2キロメートルということである。分断の苦痛を思い、統一を願わずにはいられない気持ちになった。展望室では北朝鮮の最近事情の映像、生活体験コーナー、統一念願室、北朝鮮展示室と貴重な見学の機会を得て、今後も日韓唱歌も含め近代唱歌についても研究していきたいと願うようになった。今後も常に自身の目で、耳で、足で、現地をたずねて「歌のふるさと」を研究したいと考えている。

故郷の春 (10)

■ 고향의 봄

〈신명회합창단 노래〉

1. 나의 살던 고향은 꽃피는 산골
복숭아꽃 살구꽃 아기진달래
울긋불긋 꽃대궐 차리인 동네
그속에서 놀던 때가 그립습니다
2. 꽃동네 새동네 나의 옛 고향
파란들 남쪽에서 바람이 불면
넋가에 수양버들 춤추는 동네
그속에서 놀던 때가 그립습니다

故郷の春 (10)



(訳) ふるさとは やまあいの花の里 桃の花 杏の花 かわいいツツジ
山一面の花屏風 とびはねた あのころが なつかしい

7. 終わりに

わが国で子どもたちが最初に歌った西洋の歌は、キリスト教の讃美歌や聖歌であった。それらの旋律はやがて唱歌に使われるようになっていく。今回歌唱教材として取り上げた「ふるさと」の作曲家・岡野貞一は音楽の基礎が讃美歌にあると先に述べた。「ふるさと」ほど多くの機会に歌われ親しまれている曲も無かろう。高野辰之や岡野貞一の生まれ育った故郷ばかりでなく、すべての人にとって「ふるさと」は日本人の心として歌い継いでいかれる名曲であると考えている。

歌唱指導に於いても、歌手や演奏者との共演においても、ピアノ伴奏は基本的に楽曲の構造の基礎をなすものであることは常に述べているが、今後も楽曲研究や演奏技術に関してもたゆまぬ努力を続け、ピアノ伴奏を通じて演奏・社会活動の中で大いに貢献していきたいと考えている。

引用・参考文献

1. 鈴木恵一編著「岡野貞一とその名曲～岡野貞一伝記～」 2005年
2. 鮎川哲也著「唱歌のふるさと 花」音楽の友社 1992年
3. 安田寛著「日韓唱歌の源流」音楽の友社 1999年
4. 長峰佐和著「日本歌曲の詩想」森企画 1998年
5. 読売新聞文化部「唱歌・童謡ものがたり」岩波書店 2000年
6. 読売新聞文化部「愛唱歌ものがたり」岩波書店 2003年
7. 「日本のうた ふるさとのうた」全国実行委員会編 講談社 1991年
8. 安田寛代表編「原典による近代唱歌集成 解説・論文・索引」ビクター 2000年
9. 小学生の音楽 6 教育芸術社 2005年
10. 中田喜直・小林純一編「現代こどものうた名曲全集」音楽の友社 1969年
11. 寺蘭玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅰ」鹿児島女子短期大学紀要第35号 2000年
12. 寺蘭玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅱ」鹿児島女子短期大学紀要第36号 2001年
13. 寺蘭玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅲ」鹿児島女子短期大学紀要第37号 2002年
14. 寺蘭玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅳ」鹿児島女子短期大学紀要第38号 2003年
15. 寺蘭玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅴ」鹿児島女子短期大学紀要第39号 2004年
16. 寺蘭玲子「ピアノ伴奏の手法とその指導法の研究Ⅵ」鹿児島女子短期大学紀要第40号 2005年

(2005年12月1日受理)